

ベトナム人留学生とコミュニティの特徴ー中国人留学生との比較からー

Characteristics of Vietnamese Students and Their Communities in Japan: A Comparison with Chinese Students

佐藤由利子 (東京工業大学)

Yuriko SATO (Tokyo Institute of Technology)

キーワード：留学生、コミュニティ、集住、ベトナム、中国

ベトナム人留学生は、東日本大震災後に急増し、2014年以降、中国人留学生に次いで、日本で学ぶ留学生の最大グループとなっている。本稿では、その特徴を、中国人留学生などとの比較において分析する。また、彼らが形成したコミュニティの活動、階層性、日本社会との関係性、将来展望について考察する。

1. ベトナム人留学生増加の背景と特徴

2011年の東日本大震災以降、それまで主流だった中国、韓国、台湾出身の留学生の割合が減少し、代わって、非漢字圏からの留学生が増加した。増加のきっかけは、震災による漢字圏からの留学生減少に危機感を抱いた日本語学校関係者が、非漢字圏での学生リクルートを強化したことで、日本留学の利点として、資格外活動の上限が週 28 時間と他国より長いことを強調した。このことは、アジアの中で比較的貧しい国々の若者にアピールし、働きながら学ぶ留学生の急増につながった。

ベトナム人留学生の伸びは、2011年から2018年にかけて14.2倍と著しく、2014年以降、中国人留学生に次ぐグループとなっている。2017年の在籍状況を見ると、中国人留学生の58%が大学に在籍するのに対し、ベトナム人留学生では21%、ネパール人留学生では17%に過ぎない。他方、専修学校専修課程（以下、専門学校）在籍者は、ベトナム人留学生の35%、ネパール人留学生の51%に上り、日本語教育機関在籍者は、ベトナム人留学生の43%、ネパール人留学生の31%に上る。また、ベトナム人留学生における女性比率は43%で、中国人留学生の48%よりも低いが、ネパール人留学生の31%よりも高い。大学在籍者が少ない要因としては、日本語教育機関で学んでいる間に、大学への進学に必要な日本語能力（日本語能力試験 N2 レベル）に達しない者が多いことが挙げられる。日本学生支援機構の「平成 27 年度私費外国人留学生生活実態調査」結果に基づく分析では、N3以下の学生の割合が、専門学校に在籍する非漢字圏留学生で54.7%、学部正規課程でも30.3%に上る（佐藤 2016：5）。同調査の日本語教育機関在籍者の回答を国別に比較すると、アルバイト従事率は、中国人留学生では65%にとどまるのに対し、ベトナム人とネパール人留学生では99%に上り、週 20 時間以上アルバイトをする者の割合は、中国人留学生では47%だが、ベトナム人留学生では83%、ネパール人留学生では88%に上る。働きながら学ぶ生活のため、日本語の学習に十分な時間を割けない状況が窺える。

法務省「在留外国人統計」（2019）に基づき、ベトナム人留学生と中国人留学生の居住地を比較すると、中国人留学生では、東京に居住する者が43%に上るのに対し、ベトナム人留学生では26%に過ぎず、大阪、埼玉、千葉、福岡など、東京に比べて物価が相対的に安い府県に住む傾向が見られる。物価が比較的安く、アルバイト先が見つかりやすい地域を選択しているためと考えられる。地方拡散の傾向は元留学生においても見られ、中国人の技術・人文・国際業務（以下、技・人・国）の在留資格者で東京に居住する者は38%、神奈川、埼玉、千葉を加えた首都圏では68%に上るのに対し、ベトナム人では30%に過ぎず、首都圏以外の地域で就職・居住する傾向が強いことがわかる。

2. ベトナム人留学生関係団体

ベトナム人留学生コミュニティにおける最大の団体は、「在日ベトナム学生青年協会 (Vietnamese Youth and Student Association in Japan, VYSA)」である。ベトナム人の青年と学生が、生活、学業、仕事において助け合い、健全な生活を送ること、また、自国の文化を守りつつ、日越両国の掛け橋になることを支援することを目的に、2001年11月に東京で設立され、在日ベトナム大使館に認められた公認団体として、支援を受けている。全国に13の支部があり、独自の活動を行うとともに、VYSA執行委員会に執行委員を選出する。VYSA会長はVYSA全会員の投票によって選出され、会長の下に、渉外、スポーツ、文化、ボランティア活動、情報を担当する副会長が任命され、活動を行っている。渉外部では、企業と連携してのジョブフェア、交流会、企業見学、インターンシップなどを開催するほか、VYSAのホームページ、Facebookページ、メーリングリスト等を通じて求人情報を提供している。文化関係のイベントとしては、ベトナムフェスティバルへの協力、VYSAテット祭り、スポーツ関係ではVYSAチャンピオンカップ・サッカー大会、ボランティア活動としては、ベトナムの貧しい地域の子供たちの食事を支援する活動がある。また、ベトナム人留学生相談・支援プロジェクトS4 (S4は相談、支援、紹介、信頼の頭文字)により、来日間もない留学生の支援や相談にあたっている。

VYSA元会長への聞き取り調査(2020年2月実施)によると、2014年頃まではVYSAのイベントが、仕事や奨学金などの必要情報を入手する機会になっていたが、2015年以降SNSが急速に普及したため、VYSAは大規模イベントの開催に特化し、それ以外は、Facebookなどを通じた情報の発信が主流になっているという。VYSA Facebookページのフォロワー数は、2020年2月24日現在、37,033人に上る。VYSA会長の任期は1年であり、大学に在籍する国費奨学生やドンズー日本語学校¹出身者が務めることが多かったが、2020年に選出された会長は、ベトナムの理工系大学を卒業後、日本のシステム開発会社に直接採用された者が就任した。VYSAが留学生という枠を超え、技・人・国の在留資格などで働くベトナム人のネットワークとして発展していることが窺える。

VYSA以外の留学生関連団体としては、2018年に設立されたベトナム専門職者団体(Vietnamese Professionals in Japan, VPJ)や2019年に設立されたベトナム学術ネットワーク(Vietnamese Academic Network in Japan, VANJ)が挙げられる。VPJは日本で専門職として働く、また働きたいと考えるベトナム人のネットワークで、情報共有によるキャリア開発を目指しており、起業コンテストやブロックチェーン技術に関するワークショップなどを開催している。また、VANJは研究分野で働くベトナム人のネットワークであり、4半期ごとの科学セミナーやより大規模な年次大会の開催するほか、研究紹介、奨学金、研究助成金などに関するデータベースを構築している。理事会構成員の多くは、日本の大学で働く研究者だが、博士課程で学ぶ大学院生も含まれている。

ベトナム人留学生の多くは、日本語教育機関や専門学校の在籍者だが、コミュニティ活動の中心となっているのは、大学で学ぶ者や専門職や研究者として働く者であり、学歴や職歴による階層性が見られる。他方、新たに来日した留学生に対する相談・支援活動も行われており、働きながら学ぶ留学生の抱える課題がコミュニティにおいて共有され、支援が実施されていることがわかる。

<参考文献>

佐藤由利子(2016)「「非漢字圏出身私費留学生のニーズと特徴-日本学生支援機構・私費留学生生活実態調査の分析結果から-」、『ウェブマガジン留学交流』12月号、Vol.69、1-16頁。

¹ ドンズー日本語学校は、元日本留学生のグエン・ドク・ホーエ氏により、日本で科学技術を学ぶ人材を育てベトナムを発展させたいという願いのもとに1991年に設立された学生数5000人のベトナム最大規模の日本語学校